

文字管見

津野熊総一郎

倉敷芸術科学大学

(2010年10月1日 受理)

uerba uolant, scripta manent.

§ 1. 「言語は元来音声である」¹⁾ことは、世界に現存する言語を見ればあきらかである。音声を持たない言語はない。しかし文字を持たない言語は存在する。身近ではアイヌ語は固有の文字を持たなかった²⁾。言語の数はおよそ3,000とも3,500ともいわれているが、文字の種類はそれよりも遙かに少ない。一言語一文字体系ではない。人間が言語と呼ばれるものを持った時期はつまびらかではないが、文字を用いるようになったのは言語の歴史の中ではごく最近のことである。人類が文字を発明したのはいつ頃であろう。初源的には絵文字であって、そこから文字に発達したと推測される³⁾。

豊富な文字文献を持っていた印欧語族は、印欧語比較文法の輝かしい成果をもたらしたといえる。Polivanov がいうように「再建されるすべての共通基語は数千年の発展段階のひとつであり、その段階はそれ自体が絶対的な古さであっても、言語の発生した時代よりも遙かに我々の時代に接近したもの」⁴⁾である。

文字研究を近代の言語研究では、特にヨーロッパでは重きを置かなかった。「文字は言語学の一分野にすぎない」⁵⁾として文字研究を言語学に従属させた。それは単音文字(alphabet)がもっとも合理的かつ進んだ唯一の表記法だとの考えが基盤にあったと推される。アルファベットは言語の音を表記する役目を担うだけで、文字と音とを区別するものと考えなかった。最初に引いた Jespersen のことばは、文字は言語の衣であると考えた典型的な考えではないだろうか。「文字は音声に通常きわめて粗雑にしか対応しない」⁶⁾が、文字は必ずしも音声を忠実に再現する義務を負っていないといってもよい。音声言語の機能と文字言語のそれとは自ずとちがっている。しかし文字言語はその背後に音声言語を欠いては存在しない。

基本的には音声言語は連続的、瞬間的、聴覚的で、時間的、空間的な制約を免れない。一方文字言語は、非連続的、非時間的、視覚的であって、伝達は超時間的な性質を有する。

音声言語を可能な限り忠実に表わすには、国際音声記号が理想だが、これはあくまで記号であって文字ではない。

本稿では文字の表記と、統字論(配列)について以下に若干考えてみたい。

§ 2. 最初に文字の表記について触れよう。日本語は元来文字を持たなかった。中国

の漢字の字形を崩して平仮名が、また漢字の字形の一部を使って片仮名が生まれた。自国語を表記するために漢字という既成の文字を借用して、日本語の構造に沿うよう様々な手だてがなされ今日に至ったのである。その過程をここでは触れないが、万葉仮名から始まり、実字（名詞・動詞・形容詞）に漢字を、形容詞の変化語尾、動詞の活用語尾に仮名を担わせ共存する漢字仮名交じり文を成立させたのは、日本語が膠着語的特徴⁷⁾を有しているためであろう。言語類型論的な分類では、古典中国語は一字・一語・一音節を原則とする孤立語である。言語的特徴を異にする言語が既成の文字を用いて表記するには多くの場合何らかの工夫が要る。漢字文化圏の朝鮮語（朝鮮半島で主に話される、または話されてきた言語の意）、ヴェトナム語、西夏語の例を見ると、自国の言語を表記するためには結局漢字を選ばなかった。その代わりに漢字に代わる独自の文字を、朝鮮語はハングル⁸⁾を、ヴェトナム語はチュウ・クオックゲー⁹⁾を、西夏語は西夏文字¹⁰⁾をそれぞれ創った。そのどれもが自身の言語を漢字よりも精密に記述、表記することができた。

ただ、チュウ・クオックゲー、西夏文字と違って、日本語は漢字の中に仮名を組み込んだ点がユニークであった。これが多様な文字を呼び込む道を開いたといえよう。

§ 3. 日本語の例を見よう。

Ex.1「来月10月はBirthdayネ。プレゼントetc.ご期待を！」

用いられた文字の種類は、漢字、平仮名、片仮名、ローマ字、アラビア数字が線条的に配列されている。「来月」は（漢字）、「10月」は（アラビア数字・漢字）、Birthday（英語）、プレゼント（外来語・英語に由来）、etcは（ラテン語 et cetera）、「ご期待を！」（仮名・漢字・平仮名・感嘆符）。EX.1.を次のように表記しても意味の違いはない。

「来月10月は誕生日ね。Presentなどご期待を！」

すべて平仮名で書いても同様である。

「らいげつ じゅうがつは たんじょうびね。 おくりものなど ごきたいを！」

分かち書きすると文意は把握し易くなる。

Birthdayを「バースデー」、etcを「エト セトラ」とそれぞれ音読みしてもよい。「誕生日」、「など」はBirthday, etcの訓読とも見なせる。外国語を交えても語順は日本語なので、漢字仮名交じり文と差異はない。また、縦書き・横書き共に可能である。

§ 4. 漢字の「形音義」の概念を用いて、日本語に他の文字体系が組み込まれた場合を考えてみよう。



文字は客体を名付ける形と音が結びついて成立する。これが絵と文字の相違である。「形」が客体を想起させるだけで言葉（義）が介在しないと文字として機能しない。

表音文字のアルファベットの、たとえば略語JRは、義を喚起し、記号としての役割を

有する。しかしアルファベットの略語を片仮名で「ジェーアール」とすると、「形」JRと「義」(Japan Railway)を喚起しない。(以下(())は読み方、「」語形とする)。

平仮名・片仮名はいずれも音節文字である。平仮名(単体字)はそれ自体「義」を有する場合がある。たとえば「ま」は「間」を意味する。片仮名はそれ自体意味を有しない。これは片仮名が「元来漢字の傍に付け、漢字と共に用いられるものとして発生したのであって、〈略〉その形も独立性に乏しく、むしろ符号的である」¹¹⁾からで、アルファベットの略語の読み(音)を表すのに適している。

音節文字が2語以上の連続体(文字列)で有意味となるのは、目標言語に「形」・「音」・「義」を内包している場合に限られる。平仮名は日本語を表記するためのものとして発達してきたので意味を喚起することができる。片仮名はもともと漢字の読みを表すために添えられたもので、平仮名とはその性質をことにする。たとえばNATOの((ナトー))は「音」のみであって語形ではない。しかしNATOはNorth Atlantic Treaty Organizationを喚起するので、有意味であり、Natoism、Natoistという派生語も生じているので語と認識される。一方「ナトー」は有意味とならない。略語でない「ライオン」は本来原語lionを不完全でも文字列として表記しているので有意味である。「形」と「義」を獲得していることになる。さらに((ライオン))という読み(音)も獲得している。

また、

N A T O
北大西洋条約機構

のように表記すると、NATOの訓読みといえるかもしれない。

片仮名は、漢字あるいはアルファベット略語のように訓読みは有しない。訓読みがないというのは「義」を獲得しにくい。

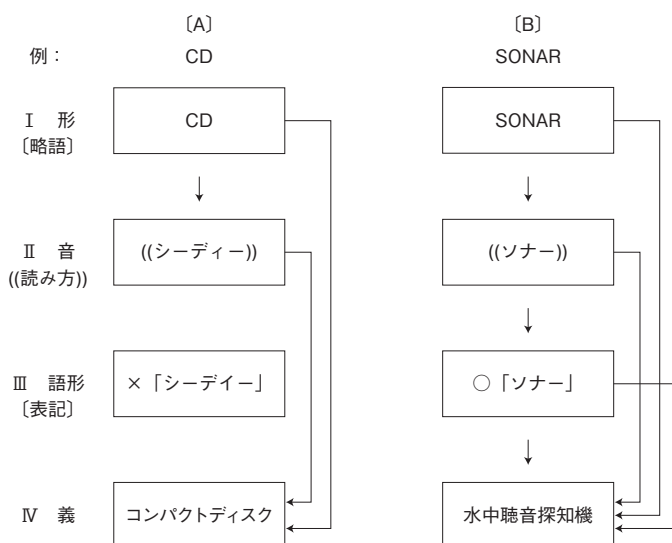
略語の読みをさらにいくつか拾ってみよう。APEC((エーベック))、ASEAN((アセアン))、AWACS((エーワックス))、BASIC((ベーシック))、CAD((キャド))、CAPTAIN((キャプテン))、COBOL((コボル))¹²⁾。

OED第2版では上記7語のうち読み方を示しているのは、ASEAN、AWACS、BASIC、COBOLの4語。CADは見出しのみで読み方はない。CAPTAINは未収録。略語でも文字列、つまり語と認識できる(形→義)の関係があれば、読み方が定着する。さらに語であれば「形」を獲得する。「形」すなわち文字は元来意味を喚起するためのものであるから、単一体のアルファベットは表音性が高くても、略語であっても文字列になると表意性が優勢になる。だから、たとえば、本来略語のSONARの((ソナー))は「ソナー」を獲得している。従って略語とは意識されにくいかもしれない。「アセアン」、「エーベック」、「コボル」、「キャド」が日本語の表記として定着しにくいのは、これらは音(読み方)のみなので「義」を獲得しにくいからだ。ASEAN、APAC、CAD、COBOLと衝突し、原語が優先するので日本語の「読み」(())は義と形を獲得しにくいだろうと思われる。

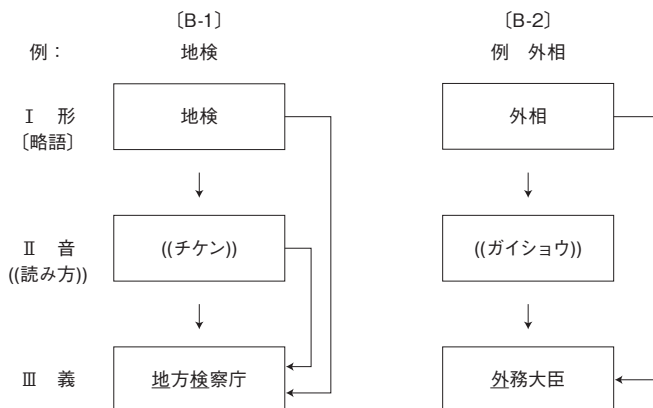
BASIC、CAPTAIN はそれぞれ basic、captain と同音・同文字・異義語なので、これらとの連想から略語でなく語と認識、つまり略語としての「義」を獲得している考えられる。

また文字列は言語によってその配列が特徴づけられる。仮に英語で ACSPA、ADC、LBCLOO という略語があっても、それを / akspa /、/ ads /、/ rbklu: / とは読みづらい。アルファベット単体読みになるだろう。仮に日本語でも「アクスパ」、「アドス」、「ルブクルー」のような語形は定着しないだろう。それぞれの言語らしさ（音配列）に馴染まないと思われるからである。

§ 5. 上記をまとめると、アルファベット略語が日本語の文字体系に組み込まれると、形音義の関係はおよそ次のようになるだろうか。短い ↓ は I、II、III、IV の連続した喚起の関係を、長い ↓ は I、II、III、IV のそれぞれの直接的な喚起の関係をそれぞれ表す。



日本語の略語は次のようで、アルファベットと漢字との機能上の相違が明らかである。



ただし、〔B-2〕は意味をとった略語、〔B-1〕は文字の頭をとった文字通りの略語で、少し性格が異なる。アルファベット略語〔B〕は日本語の〔B-1〕に相当する。

漢字が一語で表語性をもっているのたいして、アルファベットは単一では表音的であり、文字列になると、語と認識され表語性を有することになる。

英語の knight と night¹³⁾ の関係は同音ながら表意〔語〕的なので同音衝突は起こりにくい。言語は究極的には表語を目指すものであるから、英語は同音異義語を多く持つ言語だが、表語としての機能を考えると効率的である。-ed 形は、次のように wanted/id/, played/d/, wahsed/t/ と発音を異にしても、表語として過去・過去分詞の機能を果たしていることはあきらかである。

英語には一部訓読み(?)の可能な例がある。ラテン語由来の e.g (exempli gratia), EX.1 の etc. (et cetera), ie. (id est) はそれぞれ for example, and so on, that is とも読む。

§ 6. 次に統字論(配列)について考えよう。大きく分けると縦書きと横書きの二つになる。横書きはヨーロッパの諸言語に見られるような左から右に書いていくのと、ペルシャ語、ヘブライ語などのように右から左へ書いていく型がある。縦書きも二つあって、右から左へと、左から右へ行を変えていく型がある。前者はハングル、漢字、西夏文字など、後者はモンゴル文字、満州文字などがある。英語では次に見るように左横書きである。

Ex.2. There is no poeple in the world has no language, but there are many languages in the world that have no writing. For example, the indigenou languages of North America are as numerous and as divergent from one another as languages can be anywhere else in the world and yet have no writing systems of their own.

(Yuen Ren Chao: *Language and Symbolic Systems*, p.101)

看板・標識などを除き、通例縦書きにすることはない。文字の形の構造が、表音文字はおおむね一音が一文字に対応して線条的に一単位の文字を作り、漢字などの表語文字も単一語がやはり線条的に連なり、より大きな単位の文を組み立てる。

英語をはじめ表音文字であるローマ字・キリル文字を用いる言語が、自国語以外のヨーロッパの諸言語を表記する際は原綴りのままか、該当する箇所をイタリック体にしたたり、また意味を添える。日本語の津波、過労死はそれぞれ tsunami, karoshi と英語に定着しているのでそのままローマ字表記される。横左書きという共通性を持っている。

EX.2の内容を日本語では縦書きも可能である。縦書き・横書き両用は日本語独自といえる。横書きは左右いずれかからでも書ける。これも他の言語に見られない。

単音文字の例として満州文字¹⁴⁾の例をみよう。ここでは P.G.Möllendorf (1892) の方でローマ字転写¹⁵⁾の形をとる。原典は縦左書きである。

Ex.3. suwayan morin aniya, amba genggiyen han i ninju se de, aniya biyai juwan ninggun de, cimari erde tuhere biyai dulimba be hafu suwayan genggiyen siren

gocika bihe,

『満文老當』天命三年正月（1618年）

〔訳文〕 戊年の年、大 Genggiyen Han の六十歳の正月十六日の明け方、黄色い明るい光線が沈む月野中央を貫いて現れた。

満州文字は横書きしないが、ローマ字転写¹⁶⁾すれば左横書きが可能である。満州文字の字母は縦に組み合わせて、行を左から右に移す。字母は一字母一音方式なので、ローマ字転写しても満州語として理解出来る。仮に満州文字を横書きにすると右から左に表記するウイグル語、ヘブライ語などの型になるだろうか。

大半の文字は上記のように4種類の配列に分類されるが、未解読のファイストの円盤文字も円盤の外側の左から始まり内側に向かって書かれていると推測される。従って基本的には横左書きの型に入るだろう。

§ 7. 歴史的経緯は考慮しないでも、ある言語が特定の文字体系を採用するかどうかは全く恣意的で必然性はない。ただし、文字を持たない、あるいは新たに文字を採用しようとする言語の場合には、もっとも合理的な文字を取り入れるのが普通であろう。言語の系統を異にするインドネシアのチアチア語 (CiaCia) がハングルを採用したのは理にかなった例といえよう。このように文字の系統と言語の系統とは全く別のものである。

§ 8. 以上文字論の中で二つの事柄について触れてみたが、統字論では日本語の場合うまく収まりきれないことがわかった。日本語では表記と配列が絡み合っているのので、それを統一的に述べるには稿を改めたい。

【注】

- 1) Jespersen (1933) p.17
- 2) 口承文学であるアイヌの叙事詩ユーカラを金田一京助の指導によって金成まつが記憶するユーカラを筆録（ローマ字表記）して成ったのが、金田一京助訳注・金成まつ筆録『アイヌ叙事詩ユーカラ』（全20巻の予定であったが9巻で中絶）。服部（1964）は10のアイヌ語方言を記述したもので、音韻表記されている。このときすでに千島アイヌ語は絶滅していた。
- 3) 河野（1963）p.5; Bradley（1913）p.2など。
- 4) Polivanov（1928）p.50 脚注
- 5) Martinet（1970）p.8
- 6) 河野（1994）p.4
- 7) たとえば日本語の用言を例にすると、「書かせられなかった」は、「書か」「せ」「られ」「なかっ」「た」と特定の文法カテゴリーにそれぞれ接辞を膠着させるもので、印欧語の変換形がすべての文法カテゴリーを含むものとは異なっている。河野六郎（以下敬称略）はつとに日本語をアルタイ型 (Altaic type) と分類している。1971年度の河野の「アルタイ語学」の講義でもこの点について論じられた。
- 8) 河野（1955）、志部（1972）
- 9) ベトナムでは漢字は廃絶されて変造ローマ字が国字となっている。ローマ字に声調を示す記号が付けられるなどの工夫がなされ、きわめて高い表音性を有している。
- 10) 一般には「漢字を基にした音節文字」（『広辞苑』第6版など）と理解されるが、漢字にはみられない文字構成要素を考案している上に、表語性と併せて文法情報を文字に組み入れて入る点がユニークである。この項は西田（1964-6）、（1967）、（2001）に負う。；西夏語・西夏文字（1964-6）はNevsky（1960）な

どの研究が先行するが、西田龍雄によって解説された。

- 11) 橋本 (1949) p.55
- 12) 『例文で読むカタカナ語の辞典』第3版「アルファベット略語集」による。ただしAPECの((エーベック))という読みを落としている。
- 13) nの前のkが消失したのは17世紀後半とされる (Jespersen (1909) 12.71)。
- 14) 満州文字は蒙古文字を満州語を表すように工夫したものである。字母に圈と点を加え、同形文字との区別を行い、漢字音を表記するための字母も作った。これが有圈点満州字で、通常満州文字はこれをいう。蒙古文字が一字一音表記でなかったために、満州語を表記する上では不十分であったので満州文字は一字一音を原則とした。ただしt,d;k,gはそれぞれ同一音素の変異音で、後続するに母音によって弁別されるので一つの読み方しかないように工夫されている。同一文字であっても、たとえばEX.3.(単独形) i (語中形) morin、(語末形) cimariのiは、それぞれ語形を異にする。これは日本語で助詞の「は」とハ行の「は」を機能的にかき分けているのに似ている。
満州文字が源とする蒙古文字は当初ウイグル文字と基本的には同じ字形であった。このウイグル文字の一字多音価の欠陥をモンゴル文字はそのまま受け継いだ。このウイグル文字は、アラム文字から派生したソグド文字を起源とする。元々ソグド文字は右横書きであった。それをそのまま縦に起こしたのがウイグル文字で、文字の系譜はアラム文字→ソグド文字→ウイグル文字→蒙古文字→満州文字と、そしてさらにシベ文字(満州語口語に近い)に連なっている。山本(1969)は満州語口語に就いて初めて詳細な記述がなされた辞典である。未刊行の口語総索引を利用することによって満州語口語の全体像が把握できる。
- 15) 訳文は『満文老當』I 太祖 東洋文庫叢書第十二(1955)による。
- 16) 転写(transcription)は該当言語の音韻論的観点から考慮して決定するものであるのに対して、翻字(transliteration)は該当文字を機械的にローマ字に転写するだけである。たとえば日本語の「来た」、「北」はローマ字表記ではともにkitaである。音声学的に前者のiが有声音、後者のiは無声化した母音であるが、音韻論的には同一音素であるので転写はiとなる。仮に前者を仮名で「きた」、後者を「キタ」とすれば音声上の区別ができるかもしれない。

【参考文献】

- Bradley, Henry (1913) : *On the relations between spoken and written language, with special reference to English*. London: [Folcroft Library Editions]1973
- 橋本進吉(1949)『文字及び仮名遣の研究』橋本進吉博士著作集第三冊 東京:岩波書店.
- 服部四郎編(1964)『アイヌ語方言辞典』東京:岩波書店.
- Jespersen, Otto: *Modern English Grammar* (1909) Vol.I. Heidelberg: Carl Winter's Universitätsbuchhandlung.
- Jespersen, Otto: *Essentials of English Grammar* (1933) London: George Allen & Unwin.
- 金田一京助訳注・金成まつ筆録(1993)『アイヌ叙事詩ユーカラ集』全9巻東京:三省堂.
- 河野六郎(1955)「朝鮮語」『世界言語概説』下市川三喜・服部四郎(編)東京:研究社.
- 河野六郎他(1963)『日本語の歴史 2 文字とのめぐりあい』東京:平凡社.
- 河野六郎(1994)『文字論』東京:三省堂.
- 河野六郎、亀井孝、千野栄一編(1988-1996)『言語学大辞典』東京:三省堂.
- Nevsky, Nikola: *Tangutskiy Filologia* (1960) Moskva: Nauka.
- Martinet, André (1970) *Eléments de linguistique générale*. Paris: Librairie Armand Colin.
- Möllendorff, P.G., (1892) *A Manchu Grammar, with analysed texts*. Shanghai.
- 西田龍雄編(2001)『世界文字辞典』(別巻『言語学大辞典』)東京:三省堂.
- (1964-6) I, II 『西夏語の研究』東京:座右宝刊行会.
- (1967)『西夏文字』紀伊国屋新書 東京:紀伊国屋書店.

- (2001)『西夏王国の言語と文化』東京：岩波書店.
- Polivanov, E.D. (1928) *Vvedeniji f jazikoznanie*. Leningrad.
- 『例文で読むカタカナ語の辞典』第3版 (2001) 東京：小学館.
- 志部昭平 (1972) 「朝鮮の文字ハングル」(『国際文化』213号)：東京.
- 山本謙吾 (1969)『満州語口語基礎語彙集』東京：東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所.

On Writing Systems

– A Brief Sketch

Soichiro TSUNOKUMA

*College of Liberal Arts and Science for International Studies,
Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan*
(Received October1, 2010)

This paper looks into some problems on writing systems, especially Japanese kana and katakana.

Kana represents sound, katakana represents loan word in present day. But in some cases, katakana represents forms in abbreviation from foreign languages.

Japanese writing system has two ways in writing form, ie. writing in descending vertical from right to left (tategaki)and writing horizontally from left to right and right to left(yokogaki). These writing systems does not exist in any other languages in the world.